

子どもの貧困対策 全国47都道府県キャラバン in 山梨 報告書



2018年11月18日（日）、「子どもの貧困対策全国47都道府県キャラバン in 山梨」が山梨県との共催で、山梨県立文学館にて開催されました。会場には、第一・二部に95名、第三部に45名、延べ140名が集まりました。

第一部では、村井琢哉・副代表理事からの挨拶に続いて、共催である山梨県より小島徹・福祉保健部部長からのご挨拶をいただきました。その後、下條勝・山梨県福祉保健部子育て支援課課長より、山梨県の子どもの貧困に関する制度をご紹介いただきました。

また第二部では、大森菜月・山梨県立大学3年、清水綾子・都留文科大学3年、藤井嵐士・共立高等看護学院2年の3名の学生と、篠原真由美・山梨県教育委員会中北教育事務所 スクールソーシャルワーカー、進藤明美・山梨県社会福祉協議会 生活支援課課長補佐 社会福祉士、中澤桂太・南アルプス市福祉総合相談課 精神保健福祉士、廣瀬ゆり・山梨県立北病院 社会生活支援部地域生活支援室 地域連携担当

（地域移行推進）精神保健福祉士の4名の実践者をパネリストに、芦沢郁哉・NPO 法人 bondplace 理事、真鍋薫子・同左コーディネートののもと、パネルディスカッション『今、山梨県で必要な子どもの貧困対策』が行われました。学生からは、活動を始めたきっかけや活動を通して感じていること、地域の人たちをお願いしたいことについて、「地域の人々のノウハウを教えてください、一緒に活動したい。」「活動をもっと知ってもらいたい。」「子どもの貧困問題について、周りの人たちに発信してもらいたい。」などとお話いただきました。また実践者からは、教育や地域、医療などそれぞれの活動分野からみえている子どもたちの現状や必要な支援、地域のあり方



また実践者からは、教育や地域、医療などそれぞれの活動分野からみえている子どもたちの現状や必要な支援、地域のあり方



について、「課題よりも可能性に、より目を向けていきたい。」「できる人ができるときにできることをするのがよい。」「話を聴く姿勢が大切。」などとお話をいただきました。ディスカッションのなかでは、パネリストの学生から、場づくりの工夫についての質問があり、実践者からそれぞれの経験をもとに、そのポイントについて教えていただき、活動を進めるうえでの困りごとや解決策の共有が行われました。

また第三部では、「“想い”を共有してつながろう」をテーマに、実行委員である山田真宙・京都教育大学、真野結佳子・山梨県立大学、羽田航太・山梨学院大学の3名の進行で、レゴブロックを使ったワークショップを行いました。参加者は、レゴブロックで思い思いの“アヒル”の形をつくりながら、自分がどんな人なのか、自分が支えたいと思う人についてなど、グループで共有しました。また、参加者には種火の付箋が配られ、イベントを通して感じたことや気づきを記入し、富士山が描かれた模造紙へ貼りだしました。最後には、参加者それぞれの想いによって熱く燃え上がる富士山の模造紙ができあがりしました。参加者からは「多くの気づきがありました。」「いろんな情報や知識、人とのつながりが自分の糧になりました。」「まずは人々に知ってもらうことから。知らなきゃ協力も得られないと思いました。」などの感想をいただきました。今回のキャラバンは、参加者それぞれが顔を合わせてつながりあうことのできる、きっかけとなる場となりました。

【子どもの貧困対策全国47都道府県キャラバン in 山梨】

日時：2018年11月18日(日) 13時30分～17時30分

場所：山梨県立文学館

主催：公益財団法人あすのば／共催：山梨県

後援：内閣府、甲府市、甲府市社会福祉協議会、山梨県教育委員会、山梨県社会福祉協議会

参加者：第一・二部 95人 第三部 45人 合計 延べ140人が参加

